

語註・典故・作詩メモ

・清商…澄んだ音色。

結句		転句		承句		起句		詩題
聴	●	小	●	閑	○	白	●	三伏楽茶
到	●	齋	○	人	○	日	●	
清	○	煮	●	獨	●	青	○	
商	○	茗	●	靜	●	天	○	
滌	●	松	○	下	●	熱	●	
夏	●	風	○	蘆	○	屋	●	塩韻
炎	◎	起	●	簾	◎	檐	◎	

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

その他のメモ

読み下し文

清商を聴くに到り 夏炎を滌ぐ

小齋に 茗を煮れば 松風起き

閑人 独り静かに 芦簾を下す

白日 青天 屋檐を熱し

三伏楽茶

平仄式

仄起式

名前

作詩日

令和五年七月十二日

牛山 知彦

No. 2

邀えーむかえる	通るーのがれる	◎語注・典故など	白文												陽韻仄起
			結句	批正	転句	批正	承句	批正	起句	批正	詩題	批正			
			樹● 樹● 蟬○ 聲○ 斜○ 夕● 陽○		端○ 然○ 心○ 靜● 即● 身○ 冷●		池○ 亭○ 邀○ 友● 煮● 茶○ 香○		熾● 日● 炎○ 風○ 遁● 別● 莊○		三伏樂茶				
書き下し															
		◎作詩メモ・釈文など	樹々の蟬声 夕陽 斜めなり		端然として心静なれば 即ち 身冷し		池亭に 友を邀え 茶を煮る香		熾日の 炎風に 別荘に通る		三伏 茶を楽しむ				

結 句		轉 句		承 句		起 句		詩 題
纔 ○		披 ○		恰 ●		三 ○		三 伏 樂 茶
覺 ●		襟 ○		如 ○		伏 ●		
爽 ●		獨 ●		坐 ●		茅 ○		
涼 ○		自 ●		甌 ●		亭 ○		
忘 ○		啜 ●		汗 ●		客 ●		
暑 ●		茶 ○		沾 ○		到 ●		微 韻
威 ◎		處 ●		衣 ◎		稀 ◎		

[illegible]

三伏茶を楽しむ	さんぷく　ちや　たの
三伏茅亭客　到ること稀なり	さんぷく　ぼうてい　きやく　いた　まれ
恰も　甑に坐する如く　汗　衣を沾す	あたか　こしき　ざ　ごと　あせ　うるお
襟を披き　独自　茶を啜る処	えり　ひろ　ひとり　ちや　すす　ところ
纔に爽涼を覚え　暑威を忘る	わずか　そうりよう　おぼ　しゅゐ　わす

平仄式		岡嶋 宣昭
作詩日	令五・七提出 名前	

語註・典故・作詩メモ

結句			転句			承句			起句			詩題
解	○		快	●		夢	●		三	○		
渴	●		晴	○		醒	○		伏	●		三伏楽茶
楽	●		日	●		流	○		繙	○		
茶	○		午	●		汗	●		書	○		
涼	○		風	○		恰	●		睡	●		
意	●		全	○		如	○		思	●		庚韻
盈	◎		死	●		醒	◎		成	◎		

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】
(七言絶句)

読み下し文

さんぶくちや たの	三伏茶に楽しむ
さんぶく しよ ひもと すいしな	三伏に書を繙けば 睡思成る
ゆめさ りゆうかん あたか ふつかよい ごと	夢醒めて流汗 恰も醒の如し
かいせいにちご かぜまつた し	快晴日午 風全く死す
かつと ちや たの りよういみ	渴を解いて茶に楽しめば 涼意盈つ

その他のメモ

平仄式	仄起式	名前	高橋幸雄
作詩日	令和五年七月		

語註・典故・作詩メモ

三伏：夏の最も暑い時期
 池塘（120c）：池、鯉山の湿原や泥炭地にある池、池の堤
 発荷花（23d）：はすの花が咲く
 俄頃「213」：しばらく

その他のメモ

結句	転句	承句	起句	詩題
俄 ○	逍 ○	池 ○	三 ○	三伏楽茶
頃 ●	遙 ○	塘 ○	伏 ●	
登 ○	倦 ●	一 ●	丘 ○	
樓 ○	怠 ●	面 ●	林 ○	
獨 ●	探 ○	発 ●	蟬 ○	
楽 ●	休 ○	荷 ○	語 ●	麻韻
茶 ◎	處 ●	花 ◎	嘩 ◎	

読 み 下 し 文

俄頃
 樓に登り
 獨茶を楽しむ

逍遙に
 倦怠し
 休み處を探す

池塘
 一面に
 荷花発す

三伏
 丘林
 蟬語嘩し

三伏茶を楽しむ

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

作詩日

R 5・6・27

平仄式

平仄起式

名前

武田 一郎

語註・典故・作詩メモ

○甌中・・熱いせいろう（蒸し器）の中、酷暑の形容
 ○漿・・どろりとした汁

結句	転句	承句	起句	詩題
一	遠	正	溽	三伏樂茶
碗	雷	之	暑	
清	忽	三	甌	
茶	轟	伏	中	
亦	竹	汗	暉	
自	風	如	草	陽韻
涼	起	漿	堂	

読み下し文

一碗の清茶亦自ら涼し

遠雷忽ち轟けば竹風起こり

正に之三伏汗漿の如し

溽暑の甌中草堂に暉ぐ

三伏樂茶

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

作詩日	平仄式	仄起式	名前
令和5年7月1日			

平賀康雄

その他のメモ

「陽韻仄起」

氏名 古川 彌

◎語注・典故など

◎作詩メモ・釈文など

白文

結句	批正	転句	批正	承句	批正	起句	批正	詩題	批正
難	▲	臥	●	草	●	梅	○	三伏樂茶	
灑	●	看	○	堂	○	雨	●		
茶	○	炎	○	睡	●	初	○		
湯	○	樹	●	起	●	收	▲○		
喫	●	熱	●	苦	●	暑	●		
一	●	三	○	思	○	氣	●		
觴	○	伏	●	涼	○	強	○		

読み下し

難 ^{わづ} ひ茶湯に灑 ^{そそ} ぎ一觴を喫す	臥して見る炎樹に熱三伏	草堂に睡り起きて苦 ^{ほろ} だ涼を思 ^{おも} う	梅雨初めて収まり暑氣強く	三伏樂茶
--	-------------	--	--------------	------

語註・典故・作詩メモ

三伏 夏の暑い盛りの時期
 淋漓 汗などが滴る様子
 榻 腰掛 長椅子

初伏・中伏・末伏の三日を言う

結句	転句	承句	起句	詩題
獨 ●	緑 ●	淋 ○	三 ○	三伏樂茶
坐 ●	陰 ○	漓 ○	伏 ○	
榻 ●	風 ○	流 ○	炎 ○	
牀 ○	爽 ●	汗 ●	威 ●	
閑 ○	清 ○	仰 ●	何 ●	
樂 ●	涼 ○	天 ○	可 ○	麻韻
茶 ◎	界 ●	嗟 ◎	加 ◎	

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

作詩日	平仄式	仄起式	名前
令和5年6月			松本 祐輔

その他のメモ

ひとり坐す榻牀閑かに茶を楽しむ

緑陰風爽やかに 清涼界

淋漓たる流汗 天を仰ぎて嗟す

三伏の炎威 何おか加うべけんや

三伏茶を楽しむ

語註・典故・作詩メモ									

その他のメモ									

結句			転句			承句			起句			詩題	
独	●		涼	○		帰	○		三	○		三伏楽茶	
坐	●		衣	○		家	○		伏	●			
前	○		冷	●		啓	●		風	○			
茶	○		気	●		牖	●		停	○			
眺	●		寛	○		無	●		路	●		陽韻	
夕	●		閑	○		人	○		熱	●			
陽			裏			房			強				
読み下し文													
独 ^{ヒト} り坐 ^ザ して茶 ^{チャ} を前 ^{マエ} に夕陽 ^{セキヨウ} を眺 ^{ナガ} む			涼 ^{リョウ} 衣 ^{ウイ} 冷 ^{レイ} 気 ^キ 寛 ^{カン} 閑 ^{カン} の裏 ^{ウチ}			家 ^{イエ} に帰 ^{カエ} つて牖 ^{マド} を啓 ^{ヒラ} く無 ^ム 人 ^{ジン} の房 ^{ヘヤ}			三 ^{サン} 伏 ^{ブク} 風 ^{カゼ} は停 ^ヤ み路 ^ロ 熱 ^{ネツ} 強 ^{ツヨ} し			三 ^{サン} 伏 ^{ブク} 楽 ^{ラク} 茶 ^{チャ}	

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

作詩日	平仄式	仄起式	名前
令和五年七月一日			三浦昭二

語註・典故・作詩メモ				結句	転句	承句	起句	詩題
頃刻・・・しばらくの間 清韻・・・澄んだ音色の響き 風呂・・・喫茶用の湯を沸かすための鼎型の茶道具 点前・・・抹茶をたてる作法				啜 ●	亭 ○	頃 ○	暑 ●	三伏楽茶
				茶 ○	主 ●	刻 ●	威 ○	
				忘 ●	点 ●	風 ○	三 ○	
				夏 ●	前 ○	炉 ○	伏 ●	
				一 ●	消 ○	清 ○	寂 ●	
				心 ○	午 ●	韻 ●	無 ○	庚韻
				平 ◎	熱 ●	盈 ◎	声 ◎	
読 み 下 し 文								
茶を啜り夏を忘れ 一心平かなり 亭主の点前 午熱を消す 頃刻 風炉清韻に盈 三伏の暑威に 寂として声無し 三伏楽茶								

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

作詩日	平仄式	平起式	名前
令和五年七月二日			

森谷正彦

初稿

起句――苦熱堪消汗自流
 承句――山亭避暑午涼柔――山亭避暑翠煙浮
 転句――煎茶一服忘三伏
 結句――夕暮蛸聲閑寂秋

その他のメモ

結句		転句		承句		起句		詩題
夕	●	煎	○	山	○	苦	●	三伏樂茶
暮	●	茶	○	亭	○	熱	●	
蛸	○	一	●	避	●	堪	○	
聲	○	啜	●	暑	●	消	○	
轉	●	忘	○	好	●	汗	●	
感	●	三	○	風	○	自	●	尤韻7
秋	◎	伏	●	柔	◎	流	◎	

読み下し文

夕暮の蛸 声転 秋を感じず
せきぼ ちよう せいうた た あき かん

煎茶一啜三伏を忘る
せんちや いっでつさん ぶく わす

山亭に暑を避くれば好風柔らかなり
さんてい しよ さ こんふう やわ

苦熱消ゆるを堪ふるも汗自ずと流る
くねつ き たた ふる も あせおの なが

三伏樂茶
さんぶくらくちや

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

作詩日	平仄式	仄起式	名前
令和五年七月			
二稿 2			諸星暢義

語註・典故・作詩メモ		結句	転句	承句	起句	詩題
○葵花 アオイの花 ※鳴が○なので響●。「蝉響き」は?で「なく」と読む。		喧 ○	破 ●	卓 ●	庭 ○	三伏樂茶
		然 ○	寂 ●	上 ●	前 ○	
		一 ●	聲 ○	心 ○	蟬 ●	元韻
		變 ●	來 ○	平 ○	響 ●	
		是 ●	孫 ○	喫 ●	白 ●	三伏樂茶
		誰 ○	女 ●	熱 ●	葵 ○	
		家 ◎	訪 ●	茶 ◎	花 ◎	

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

その他のメモ
蝉の声を聞きながら、庭先の白いアオイの花を見、 夏の暑い最中にも熱いお茶を飲んで心を落ち着けている。 (ところか) 静寂を破る孫娘の声、遊びに来たのか、 家の中は突然喧噪のただ中に、いったいここは誰の家だ、 静寂を孫娘に破られ突如賑やかになった!! 結句不十分。

三伏樂茶	さんぶくらくちや
庭前蟬響き	ていぜん せみ な
葵花香	きかしろ
卓上心平らかに	たくじょうこころたい
熱き茶を喫す	あつ ちや きつ
寂を破る声来たり	せき やぶ こえ
孫女訪ふ	そんじよ と
喧然 一変	けんぜん いっぺん
是れ誰が家ぞ	こ た いえ

作詩日	平仄式	平起式	名前
2023年7月12日			山口 幸雄